

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1791 号

Serum inflammatory biomarkers are adjunct diagnostic tools for schizophrenia in clinical practice

(血清炎症性バイオマーカーの測定は実臨床における統合失調症の補助診断手段になりうる)

西紋 昌平 (にしもん しょうへい)

博士 (医学)

論文内容の要旨

神経炎症と統合失調症の病態生理との関連が明らかになってきており、炎症性バイオマーカーを用いたその病態解明は広く行われている。しかしながら、急性期統合失調症に対する炎症性バイオマーカーの診断・治療予測の有効性を評価した横断的及び縦断的研究はほとんどなされていない。本研究では、まず急性期統合失調症患者 87 例と年齢・性別・BMI をマッチさせた健常者 105 例を対象に、血清中の可溶性腫瘍壊死因子受容体 1 (sTNFR1)、アディポネクチン、色素上皮由来因子 (PEDF) を用いて両群を比較した。次に実臨床を想定して、本研究に参加した全ての急性期統合失調症患者 213 例 (抗精神病薬非投与群 42 例を含む) と年齢・BMI をマッチさせない 110 例を対象に同様の調査を行った。さらに 213 例中 121 例の統合失調症患者に対して急性期から寛解期の血清バイオマーカーの変化を観察した。また臨床症状を急性期と寛解期に簡易精神症状評価尺度 (BPRS) 及び機能の全体的評価 (GAF) を用いて評価した。年齢・BMI をマッチさせたケース、及び全ての患者と健常者を比較したケースともに血清 sTNFR1 は有意に高値であったが、血清アディポネクチンと PEDF は両群で有意差を認めなかった。さらに、抗精神病薬非投与の急性期統合失調症患者は健常者と比較して PEDF が有意に低値であった。次に、急性期から寛解期の間で sTNFR1 は有意に低下したが、アディポネクチンと PEDF は有意な変化は認めなかった。急性期及び寛解期の臨床症状、及びその変化率とこれらの血清バイオマーカーとの相関は認めなかった。興味深いことに治療による改善を認めなかった統合失調症患者は健常者と比較して sTNFR1 は有意に高く、その判別率は 93.2%であった。急性期統合失調症における炎症と低抗炎症作用は、その病態生理に関連しているのかもしれない。急性期の sTNFR1 の測定は実臨床において治療反応を予測する有効なマーカーになる可能性がある。